

【 10 】

氏名	清水純一 しみず じゅん いち
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第81号
学位授与の日付	昭和48年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ジョルダノ・ブルーノの研究

論文調査委員 (主査) 教授 野上素一 教授 野田又夫 教授 山田 晶

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は五章にわたる本論と補説よりなる。本論の第一章はルネサンス時代の時代思想を、第二章はブルーノの生涯を、第三章は喜劇から哲学へ発展したブルーノの思想形成を、第四章はブルーノの思想の体系的解明を、第五章はブルーノの思想の諸源泉を扱っており、補説ではブルーノの研究のための諸文献について解説している。

いま上述の各章ごとに概説すると、次のごとくなる。第一章では、著者はイタリア・ルネサンスの時代思想の発祥とその背景を、中世末の精神的状況から説き起して、十五世紀および十六世紀の思潮に及び、それをヒューマニズム、プラトニズム、アリストテリズム、異端思想を中心として、発展的に概説し、とくにブルーノの思想形成の基軸が、ルネサンス・ヒューマニズムの発展延長上に位置することを明らかにする。

第二章では、ブルーノの生涯の従来の諸研究を取捨選択しつつ、一貫的に追求している。まず章起にブルーノの刑死の問題をとりあげ、その死が彼の転向拒否による自らの選択であったことを、資料によって証明し、この選択が彼の哲学的信念の帰結ともいべきものであることを明らかにし、かかる死を選ばせた外的条件と「内的理由」を解明するために、ブルーノの生涯の足跡を実証的に追究する。そのためブルーノの生立ちから始めて、ナポリの修道院生活や、それからの脱出、北イタリアからフランス、イギリス、ドイツなどの遍歴生活や帰国後ヴェネツィアで捕えられ、ローマに移管され、ついに花の広場で火刑に処せられるまでの経過を、各地でのブルーノの活動やさまざまな事件に言及しつつ記述している。

第三章では、上述の「内なる理由」がいかにして形成され、成熟したかを考察するが、ブルーノの哲学の根本的立場は、宇宙論哲学にあり、それがロンドン時代に確立したと説く。つぎに『灯火を掲げる者』から、パリ時代の作品『アイデアの影』および一連の記憶術に関する論文を経て、『無限論』を中心とするイタリア語作品にいたるまでの諸作品中に発見される精神的発展の跡を、それらの作品に即しつつ究明する。

第四章では、著者はそれまで発展的側面から捉えたブルーノ哲学の相を、体系的に解明しようと試みる。換言すれば、それはブルーノに死を選ばせた「内なる理由」にあらわれている彼の世界観の体系的把握の試みである。そのため、著者はブルーノの晩年の作品『像の構成』と『形而上学用語集』を手がかりとして、ブルーノの世界観が、三世界の根源的分割の上に成立していると主張する。そしてこれら三世界とは、神、自然、人間の世界であり、それらは、それぞれイデア、その跡、影に対応していると説き、この根源的分割によって、自然と人間とは、本質的には神に依存しながらも、なおかつ独自の自主性を保つものとして認識されると説明する。

第五章では、ブルーノの思想の諸源泉について考察し、とくにこれまで軽視されていた異端思想の源流のうち、アヴェロイズムと魔術的思想の流れの解明を試みる。まずアヴェロイズムについては、それが主として北イタリアのパドヴァとボローニャを中心として存続したという定説を紹介し、それがいかにブルーノと結びついたかを究明しようと試みる。つぎに魔術については、ブルーノの『魔術論』を祖上にのせ、それがいかなるものか、そしてそれが彼の自然観といかに密着しているかを明らかにし、さらに魔術論の代表として、テラ・ポルタの立場と魔術論の典拠として尊重されていたヘルメス原典の立場を検討し、両者とブルーノの魔術論の間の近似連関性を指摘している。

論文審査の結果の要旨

ルネサンス時代の思想家の研究は、諸外国では昔から多くの研究者によって研究されているが、わが国においてはこの方面の研究はあまり進歩しなかったのは事実であり、ジュールダノ・ブルーノ（1548～1600）の研究についても同様なことがいえる。

この間にあって、著者が多年にわたる研究精進によって、ブルーノに関する出来る限り多くの関係資料を検討して、独自の解釈をうち立て、それを基礎として、ブルーノの思想に関する新見解をしめした努力は多とすべきである。

本論文の成果として、以下の諸点を挙げうるものと思われる。

(1) 諸外国のブルーノ研究者といえども、従来彼の諸作品を個別的に研究したことはあっても、体系的な研究は未だかつてされたことはなかった。それに反して、著者はブルーノの全作品を検討して、彼の思想を宇宙論哲学として体系的に理解しようとして、その試みにほぼ成功している。

(2) 従来ブルーノの異端思想への傾斜の理由について、明白な説明はされなかったが、著者はその遠因をブルーノが故郷の公学校で受けた人文主義教育に求め、その後、人文主義の発展によって促進された文献学の研究が、エラスムスの聖書註解にも窺われるように聖書の合理的解釈を生み、それが三位一体説についての異論を側面から刺戟し、ブルーノの心中に「如何にして第二のペルソナが受肉したり受胎されたりするか」という疑問が生じたことなどを挙げているが、その外にフィチーノやクサーヌスの影響も看過できないといっている。そして最後にブルーノが青年時代を過したナポリの風土に触れ、地中海貿易の隆盛とともにその地が繁栄し、スペイン人、ユダヤ人をはじめとして、多彩な民族が往来移住し、思想も百花斉放、宗教も多種多元であったこと、そしてスペインから追放されたバルテスをはじめとして、著名な異端者たちがこの地に逃亡してきたため、そこが異端思想の温床となったといっているのは卓見である。

(3) ブルーノに強力な影響力を発揮したアヴェロイズムについては、著者はパドヴァ・ボローニャを中心に発達した科学的アヴェロイズムとナポリを中心に発達した神秘的アヴェロイズムを区別しているが、ブルーノがそれら両者の影響を受けたと主張する。これは定説とは異なるが、正鵠を射た説というべきであろう。

(4) 著者は魔術については、奇妙な手品のような術を使う魔術と、ロジャー・ベーコンが「魔術は一種の応用科学である」といって感心した学問的魔術を区別し、後者は、親和力と反撥力を利用してものの吸引背反作用（例えば磁石の力）を応用するいわゆる自然魔術と呼ばれるもので、後に近代科学として発展し結晶すると説明しているのは正しい。しかし著者は、ブルーノより13歳年長で、同じナポリの哲学者テラ・ポルタ（1535～1615）の『自然魔術』とブルーノが1590年にヘルムシュタットで書いた『魔術について』とが、酷似していることを認めながら、その理由を不問にしていることは遺憾である。

その外にもいくつかの小さな瑕はもっていても、著者の主張しようと欲することは明快に述べられており、考証の確かさと諸作品の正確な分析の上に組たてられた結論は、概して人を首肯せしめる。長期にわたってルネサンスの思想を研究してきた著者の努力の結実として、この論文の価値は高く評価されるであろう。なお参考論文『無限・宇宙と諸世界について』の翻訳は、ブルーノの宇宙論が単なるコペルニクス説の受け売りでなかったことをしめす論文として、ルネサンス思想の解明に寄与するところ大である。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。